

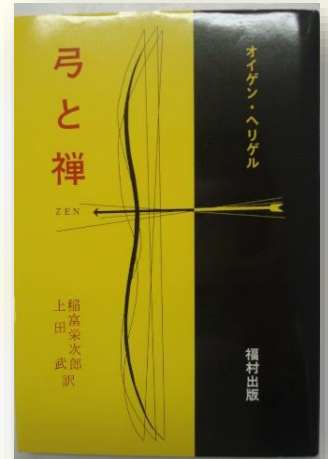
最近の小事その3

有限会社 仁礼
取締役 星野 隆幸



好きなラジオ番組に、武田鉄矢の今朝の三枚おろしがある。その中で、「弓と禅」の紹介の回があり、興味が湧いてきたのでさっそく取り寄せて読んでみた。

内容は、ドイツ人大学教授、哲学者オイゲン ヘリゲルが日本の大学で教鞭をとっていた 6 年間に弓道に出会いその事を帰国後に講演会の原稿として書き留めたものが出版されたものである。日本に滞在していたのも戦前のこと、ドイツで出版されその後、昭和 15 年日本でも出版された。その本が現在でも版を重ね出版され続けているのである。さらに昨年、世界的に著名な人物の座右の書としてその人の本棚に置いてあったことで再度ブームに火が付いた、その人物こそ、アップルの創業者、スティーブジョブズその人である。



「弓と禅」を読んで、心に残ったことがある、ある日、何度矢を射っても的に当たらないヘリゲルは、師である阿波研造師範に問うた、「如何に射てば的に当てることができるのか」、師が答えた、「すべての矢が的に当たればそれは弓道でなく見世物である。また、あなた自身で修練もせず、そのことを教えたならば、私は追放されるべきです、さあもうこの話はやめて練習しましょう。」、そしてもう一言、「射に失敗してもその事に腹を立ててはいけません、射が上手くいってもその事を喜んではいけません、快・不快の間を行き来することから離れなければなりません。」そんな言葉にヘリゲルは、日本人に流れる日常的な禅を感じたのではないのだろうか。

最近辞書を引く姿を見かけなくなった、辞書を引くことで、全く違う言葉が視界に飛び込んでくる、その事により沢山の言葉を知ることが出来る喜びをパソコンの検索では味わえない。読書にしても然り、電子ブックが普及し、図書館や書店に行くこともなくいつでもどこでも読書ができる、確かに利便性を考えれば肯定すべきだろう、だが、感傷的と思われるかもしれないが、インクの匂いやページをめくる感覚、視覚だけでなく五感に訴える本という印刷物が持つ不思議な魔力が私を魅了して止まない。先端技術が発達するのは歓迎すべきだが、それに頼り切っている現状は憂慮すべきことだと感じる。

建設業関連の講習会で講師を務めることがある、建設業者へ建設CALS推進の講義だが、時間の制約の中どうしても結果重視の講義になる、汗を流し泥にまみれ朝から晩まで現場に追われていた時代から、現場でも会社でもPCに囲まれ、膨大な書類の中で、もがき苦しむ時代になった、それでも次代を担う新人技術者を育てる時間を確保しつつ現場や書類整理に従事するベテラン先輩技術者達の苦悩が伝わってくるようだ。

ヘリゲル教授は哲学の教授なので、文章も哲学的思考と当時の文体で書かれてあるので、読みにくいとところもあるが、解説本も出版されるほどの書物なので、興味のある方はぜひ一読をお勧めする。私たち日本人が持っていたもので忘れかけたものを気付かせてくれるきっかけになるのかもしれない。